「社会的なるもの」

久　保　田　勉

社会現象を研究領域とする科学は，その出発点にあたって，それぞれの立場から対象の予備的概念規定を試みるのであるが，その根底に考えられる「社会的なるもの」の分析単位と水準をどこに定めるかという問題は，それぞれの分野が共通して視野に収めておかねばならぬ事柄であろう。

道徳現象を Sein（すなわち認識）の側面から考究するさいにも，一見の必要なしとしない。「社会的なるもの」は「行為理論」にまで下降すべきものと考えるのであるが，この件に関して，現代理論の主要動向は，分析の外延を社会現象の巨視的水準におよぼすことを目標としつつも，同時に分析方法それ自体としては，微視的水準にまで深めていこうとしている。フランスの Gurvitch，アメリカの Parsons という代表的理論家の所説がそうである。

現代理論の先端に位するこれらの所説に至るまで，Comte 以来，いくたの理論的積重ねを経てきたわけであるが，とりわけ社会心理学の発達に負うところ大であったし，その逆説にしても真実性がある。本論は，現代理論の問題点の指摘解明を試みようとするのではなく，とくに Durkheim 以来の，道徳成立の場の単位，つまり「社会的なるもの」設定の道程をたどっておこうとするものである。とくに Tarde, Durkheim, Simmel, M. Weber らの業績が，現代理論に直接の関係をもっているものと考えられるだけにまた，こんにちからみて不足するところも多く指摘しうるのである。それが何であるか，学史的見地を考慮にいれて考察しておこうというのである。

I

Comte や Spencer などに見られる有機体説は「社会的なるもの」を個別を超越した事物的存在として観念し，人間の個別的形式における独自性，能動性を否定するものであった。心理学の発達によって，彼らの素朴な見解は大きく変貌させられたが，しかし当初，心理学的・精神的有機体概念の導入によっても，その難点を克服しえず，Espinas は意識性を強調し，Worms は契約論と有機体説との統合すら企てたものの，具体的個人を否定した全体的社会観を払拭するほどの力を発揮できなかった。否定された人間との接触点を回復すること，次に他事物との類推を経ずして「社会的なるもの」を把握することが，最も注目さるべきところであったが，「社会的なるもの」を自我の空間的事物に対するがごときものとしてではなく，模倣という反復現象（相互作用）として捉え，「社会的なるもの」設定に新しい見地を与えたのは Tarde であろう。

彼の意図は「大きもって小を，大体でもって詳細を説明する代りに，小さい要素的行為の集積をもって全体の相似を説く，すなわち小をもって大を，詳細をもって大体を説明する」[1] ところにある。この見解は，「社会的なるもの」の考察にあたって「微分が数学に与えたのと同じ変化を……もたらす」[2] ものである。Tarde が「社会，それは模倣である」[3] という時，模倣によって生ずるものは，集団でも有機的統一でもなく，集団はせいぜい模倣しあう「諸個人の集合体」[4] である。だから「社会的なるもの」は模倣という全体化・社会化という機能である。これは，もちろん有機的機能ではなく，明らかに意識に基づく文化的・意味的機能である。従って，彼の考えた「社

1）　G. Tarde : Les lois sociales, 1921. p. 40.

2）　ibid. p. 40.

3）　ibid. p. 80.

4）　G. Tarde : Les lois de l'imitation, 1890. p. 73.

会的なるもの」は意識者の働きかけ（模倣関係）であり，模倣はする者とされる者とに分解され，「社会的なるもの」は結局個人間の関係に解体されるゆえ（個人主義的心理学的単子論），個人だけが実在することになる。このような事情からして，Tarde は個人の社会における役割を最も重視し，Durkheim のように，言語，宗教，道徳などを la consciense collective の拘束作用であると観る見解については，実に「偽満であり，こうした論者は，このような一つの集合的力，一定の関係における幾百万人もの個人の同時的類似を前提とすることからして，いかに一般的相似が生じ得たか，という問題の重要な難点を素通りしていることにお気付きでない」[1] ことに因っているという。つまり，二人間の inter-cérébrale の関係（psychologie intermentale）にまで立入らねば，この問題の正解は得られぬ訳である。従って，超越的社会的意識などというものは，口にすべき事柄ではなく，それは「個人の精神を支配する優勢因子ではなく，まったく個人的独創性の便利な標札，匿名の綜合にすぎない……この無数の個人的独創性だけが真であって，各瞬間に効果的活動的であって，また近接せる社会からたえず借り来たり，かつ範例を効果的に交換することにより，各社会内で常に醗酵しているものである。ゆえに，非人格的集合的精神は，無限に多数の個人精神の機能であって，その因子ではなく，いわばその合成写真であって，仮面であってはならない」[2] のである。

さて，こうして考えられた個人が模倣を始めることで，初めて社会における個人たりうる[3] とすれば，模倣を始めていない個人は社会の内に入り得ないのではないか。とすれば，親子関係・教育といった社会的事実は現実の人間関係から除外される可能性が出てこないか。もちろん，「花が太陽に向かうように，他人に向かう子供はその家庭環境から拘束よりも魅力を感ずる。かくて，その生涯を通じて範例を貪るように呑込む」[4] というのは解るにし

1） G. Tarde; Les lois sociales. p. 40.

2） ibid. pp. 44. 45.

3） ibid. p. 38f.

4） ibid. p. 40 note.

ても「あらゆる社会的事実は模倣される……普遍化される傾向がある，しかしそれは，社会的事実が社会的，つまり義務的であるからである」[1] ということも視野に持つべきであろう。教育は「子供が自発的には到達しえないような観察，感得，行為の様式を子供に強いる一つの継続的努力である。われわれは，子供をその幼少から正規の時間に食べ，飲み，眠るように拘束し，清潔，静粛，従順であるよう拘束する」[2] 面をもつ。かくては，模倣という単一のもとに，きわめて異った，従って区別されねばならぬ諸現象を混同しており，「社会現象の本質を説明せんとした心理学的要因は，実はそれ自身社会的諸原因に依存しているもの」[3] という批判もまた当然であろう。人には先天的に模倣という普遍化・結合への本能が備っているように考えているが，そこには個別者たる個人の存在しうる余地が残っていないようである。Tarde は，ほのかに拘束面を認めた気配もあるが，なにぶんにも Durkheim の拘束性主張の光彩陸離たるものがあったため，まことに消極的でしかない。「社会的なるもの」には，規「制」面と「同」化面とが個別的ではないが，同時に確実に存在している。Tarde は相互作用という関係論的考察の一歩をふみ出したものの，その一面性強調のゆえに，如上の点を安易に看過したきらいがある。「社会的なるもの」の設定を模倣に求め，大脳生理にまで立入ろうとした彼の業績は輝かしいが，一面「このような生理学がいかに行きすぎであり，またそのような類推が今日では Tarde が拒絶した有機体説よりも，皮相的であり，かつ単なる言葉だけの意味に止まっていることは，ほとんど注意に価しない」[4] という酷評を生み，「Tarde が集合的諸事実の発生に関して，模倣に帰したところの優勢な影響を，われわれの研究はどこにも確めることはできなかった」[5] と Durkheim がいったのも，誇張であ

1）É, Dukheim : Les règles de la méthode sociologique, 1950. p. 12 note.(以下「règles」と略す)

2）ibid. pp. 7. 8.

3）A. Cuvillier : Introduction à la sociologie, 1949. p. 41.

4）ibid. p. 42.

5）É, Durkheim :「règles」. p. 12 note.

るにせよ，実のないことではあるまい。

II

Tardeは，模倣によって「社会的なるもの」を説明しようとしたが，事物が模倣され一般的となるのは，それがすでに何程か義務的，社会的であるからである。しかも，この「社会的なるもの」は，人間の集合生活そのものから成立するもので，個人心理を超えている。ここに Durkheim 説の端を考えうる。

さて，Tardeは「社会的なるもの」を個人心理および心間心理の次元に還元し得ると考えたことから，さきの挙に出たのであるが，二つの点で，Durkheim は激しく対立を試みている。すなわち，第一に「社会的現実のすべてを精神的・心理的なものに還元できない。物質的型態学的基盤，組織，制度，範型，象徴，晶化し具体化された集合的価値を考慮すべき」こと，次に「精神的・心理的なものは社会的現実に統合される部分としてのみ社会学に関係しうる。その時にそれは集合心性，“集合意識”となり“個人意識に還元しえぬのみならず，それを超越し拘束する”」[1] ことである。従って，社会的事実を心理的事実から区別することは，Durkheim の最も配慮するところであり，彼が持出した外在性，拘束性の二標徴は，Tarde が先に見落した「社会的なるもの」の「制」的側面を鋭くみつめたものといわねばならない。Durkheim における「社会的なるもの」の問題は，おおむね集合意識と個人意識の論議に尽されるようである。彼が fait social を物として come des choses 取扱おうとする[2] 真意は，客観性の要求であり，社会的事実をして意味を剥奪された物的事物と同断する含みはなく，むしろそれは「諸々

1） G. Gurvitch : La vocation actuelle de la sociale, 1950. p. 32.
（以下「Vocation」と略す）

2） É, Durkheim, :「règles」. pp. XII, 27. 15 et suiv.

の象徴，観念，信念，感情，集合集象から構成されている」[1] 物であって，「社会的なるもの」は単なる肉体でも有機体でもなく，一つの精神が宿っており，この精神こそ集合的理想の一全体である。「社会生活は全然表象から成立している」[2] これ Conscience Collective であり，「社会的なるもの」と同義的である。物は「社会的なるもの」といい，集合意識という物であり，物たる社会的事実は，行動・思惟・感情の諸様式である。このような諸様式は，個人に外在的であるにとどまらず，一種の命令・拘束力をもち，個人が欲すると否とにかかわらず，個人に影響をおよぼすのである。それは「われわれの意志の所産であるばかりか，かえって外から意志を規定し……ちょうど鋳型みたいなものであって，われわれの行為はその中で必然的に造形される」[3] という。

ところで，この社会的事実を心理的事実から区別するにいかなる見解を Durkheim は示したであろうか。彼に従えば「いっさいの社会意識の原材は社会要素の数，これら要素の結合され配合される様式，すなわち基体の性質と密接な関係にある。だが諸表象の最初の素地ができ上ると，これらの表象は……部分的自律性をもつ存在となり，それ自身に固有の生活を営む。諸表象は相吸収し，反發し，あらゆる綜合を形成する力をもっている。この綜合は表象の自然的親和力で決定され，綜合が展開する環境の状態で決定されはしない。その結果，これら綜合の所産たる新しい表象も同一性質をもっている。それは，しかじかの社会構造の性格に対してではなく，他の集合表象に対して近接原因をもつ」[4] にいたる。個人の内における表象生活の判別特性を精神性と呼ぶなら社会生活は hyperspiritualité によって定義されてくる。[5] 彼は「集合心理学は社会学そのものである」[6] と結論し……社会現象を心理現象に還元し……ながらも，社会的事実の特殊性を確認せんとする。

1）　ibid. p. 8.

2）　ibid. p. XI.

3）　ibid. p. 29.

4）　É, Durkheim : Sociologie et philosophie, 1924. p. 43.

5）6）　ibid. p. 48.

単なる個人の総和以上の一体系たる社会そのものが思惟・感情・行為するとはいえ，それは，もちろん個人意識を媒体としてである。すなわち，個人意識は集合意識成立の必要条件であるが，けっして決定条件ではない。「諸個人意識は，互いに集合，滲透，融合することによって，一つの存在と成る。これは……心理的とも呼びうる一存在だが，新しいジャンルの心理的個性を構成するものである……集団はその成員が単独におかれた場合とは全然異った仕方で思惟し感情し行為する。ゆえに，もしこれらの個人から出発せんか，集団内に生起している事実については何も知るところがないであろう。つまり，心理学と社会学との間には生物学と物理・化学的諸科学間にみられるのと同じ間隙がある」。[1] この意味で，個人意識とは異った一つの集合意識は理解し得，またすべきであると説いている。「集合意識は，社会を構成する要素的諸意識間でかわされる作用・反作用の所産であるが，直接にこれら意識から派生するのではなくて，むしろこれら要素からはみ出ている」。[2] つまり，社会は個人意識を媒体として思惟し行為し感情するのであるが，その実際的主体は，むろん全体の中における集合体ということである。

心理的事実から鋭く切離された社会的事実は，かくのごとく個人の思惟・感情・行為に一定の枠を与えるもの，すなわち社会生活全般にみられる manière de faire（社会の生理学的事実）であり manière des êtres（社会の解剖学的事実）すなわち人口分布，密度，交通路の数や性質，居住形式などでもある。後者は，前者の定着した様相であるから，考察の便があるだけで究極的には同一のものである。このような，拘束・外在性の源泉は，もちろん Durkheim がいうところの “synthése sui generis” の事実である。しかし，彼はこの特異な結合の事実についていかなる説明をわれわれにあたえたか。

「あらゆる社会過程の最初の起源は内部的社会環境の構成の内に求められなければならない」[3] この環境構成要素には物と人との二種が考えられるの

1） É, Durkheim :「règles」, p. 103.

2） É, Durkheim : Sociologie et philosophie, 1924. p. 37.

3） È, Durkheim :「règles」. p. 11.

であるが，積極的因子としては「固有の人的環境」[1] が残されるところとなり，これを Durkheim は le volume de la societè と densitè dynamique の二系列から考察した。「動的密度は容積と同じく……道徳的関係に現実にあるところの……諸個人の数によって定義される」[2] ということは，諸個人の内的結合度によって決定されることを十分に認めたことである。つまり，個人に外在し，拘束するという社会は，諸個人的諸集合の合成形式（融合形式）を含んでおり，従って，Durkheim において「社会的なるもの」は実に融合関係であって拘束関係であってはならぬことになる。自説の客観的態勢を整えようとして，社会を個人意識の synthése sui generis であるとし，この点に対する執念は，ついに「社会的なるもの」を拘束の関係と観あやまらせたようである。

ところで，「社会的なるもの」を心的存在の一種とみなしながら，Durkheim は，一方でこれを個人意識とは別の存在（超越性 transcendance・非還元性 irreductibilitè）と化した。しかし，集合意識の成立過程について明刻な説明を与えておらず，表面的には synthése sui generis が標傍されたにすぎない。はたして意識の世界にこの化学的現象が妥当しうるものであろうか。彼は滲透，化合，融合によって新しいジャンルの心理的個性から成る一つの存在が生起するといったが，この昇華作用はその妥当性において，われわれの肯定するところとはなりえない。この点について Durkheim はいかに答えるか，その見解を質してみよう。「社会的事実は質的にはまったく心理的事実と変りはしない。しかしそれは別箇の substrat を持っている」[3] 「集合意識が表現しているものは，集団がおのれに作用している客体との関係において，みずから考えるその考え方である。ところが，集団に個人とは別に構成されたまま集団に作用する事物は別の性質に属している」[4] といっている。そうとすれば集合意識は synthése sui generis ということでは何の説明にもな

1）　ibid. p. 112.
2）　ibid. pp. 112. 113.
3）4）　「règeles」, p.xv.

らないが，諸種の社会集団の構造でなら十分に説明できる，という意味で存在すること，つまりその substrat によって説明すべきものとなる。「個人を除去すれば，残るは社会だけである。ゆえに社会生活の説明は社会そのものの性質中に求められねばならない」。[1] 客観性の主張躍如たりとはいえ，形而上学を退けた彼が，かえって陳腐な形而上学的実体を設定したといえよう。

Gurvitch は，Durkheim が集合意識の超越性・個人意識への非還元性をもって，「社会的なるもの」の独自性を求めんとして取出したその心理学は，実に「弁証法的関係を全然無視した閉ぢた意識の心理学」[2] であり，時代おくれの形而上学に立入ったゆえんは「彼の後継者 Mauss や Halbwachs が確認した rèciprocitè de perspectives の原理を，彼が理解しなかった」[3] ことによる，といっている。集合意識は，Durkheim にとってもわれわれにとっても，否定できない社会的現実の一様相である。しかし，これはけっして超越的なものではなく常に内在的である。それは，常に個人心理と集合心理との間にある視界の相互性に基礎を置いている。この二つの心理は，もともと具体的で一つの全体をなしている心理でありながら，それが抽象的な二つの異った観点から別々に捉えられているにすぎない。

Durkheim が「Règles」の中で示した方法論的叙述だけに従えば，Weber の行為，Simmel の相互作用，Gurvitch における社会的交渉形式のような分析的概念とは相容れぬようにみえるし，上述の Durkheim 説を固執するかぎり，この学説から得るものは，心理学か社会学かという誤った二者択一にとどまらざるを得ないであろう。しかし行為研究という現代の微視的水準における分析に対し，社会心理学的諸原理と同じく，すぐれた貢献度を示している。彼の学説に萌芽的にしか現われていない社会心理学的過程の解明を補なうことによって，Weber や Simmel について述べようとするのと同じことがいえるであろう。

1） 「règles」. p. 101.
2） 「Vocation」. pp. 372. 373.
3） ibid. p. 408.

III

「社会的なるもの」の単位を "die seelische Wechselwirkung" に求めたのは Simmel である。相互作用という語は，すでに Kant の用いたところである（Kritik der reinen Vernunft における先験的分析論）。Kant によれば，およそ判断は量・質・関係・様相を表現し，関係の判断は断言的・仮言的・選言的の別があり，これに応じて，関係の範疇として実体および偶有性，原因および結果，そして die Gemeinschaft（相互作用）を挙げている。相互作用は同時に存在するものの関係であり，選言的関係に対応させられていることから推せば，相互作用は A ist B oder C. という判断形式である。ゆえに，Gemeinschaft は相互独立的存在の関係である。Simmel の心的相互作用の観念は，かかる空間的物体相互間の因果関係を思惟のモデルとしていることから，この関係図式にそうて「社会的なるもの」を考えるに，それは実体的，具体的なものではなく，むしろある機能的なものとならざるをえない。Simmel において「社会的なるもの」は，個人の行為というよりは相互作用の集積であると考えるのが適切のようである。しからば，われわれの日常生活での社会の意味は半減されることになりはしないか。「社会的なるもの」は，現に生きて在る「我」において，根元的に把握すべきものであると思う。問題は，社会の中に置かれた「我」が社会をどう考えてこれと接し，自身の内的欲求と「我」を取巻く社会が「我」に対して迫る欲求と期待とに，どう調和させ，葛藤させているか，である。「社会的なるもの」の理論的把握は，われわれの体験構造分析の理論的把握へと進められねばならない（次節参照）。相互作用は，その両端に在る行為者，またはその集合体を行為の主体とすることによって，はじめて成立しうるものであるから，相互作用は結局それぞれ他者（「汝」）の存在を予想した上での「我」の行為に還元しうる。Simmel が個人を要素と呼んで集団構成を体系づけたとしても（Simmel; Soziologie: Untersuchungen über die Formen der Ver-

gesellschaftung, 1908, Kap.II）そこに主体としての「我」なる個人の認識過程，つまり「我」における「汝」の問題が，全然出ないのは，Simmel の上に示した相互作用の基本的観念のしからしめるところであろう。Simmel にとっての問題を深めようとするとき，どうしても相互作用における個人の問題を解く努力が必要である。

この点について，Weber の見解に解答を求めること果して可能であろうか。

Weber は，以上の，Simmel が深く志向しえなかった面に「社会的行為」の概念を携えて，「社会的なるもの」に一段と積極的な解明を試みようとした者である。彼は，経験的事実を分析的要素にまで還元し，次にそれを独自の仕方で結び合わせ，歴史的・社会的諸現象の科学的な像を構成しようと努力した。Weber は行為を「人間の態度 Verhalten（それが顕現しようと，しまいと，不作為であろうと無抵抗の忍受であろうと，どうでもよい）に対して，行為者は主観的意味を付帯せしめている場合がある。この場合，このかぎりにおいて，この人間の動作を行為 Handeln と呼ぶ」[1] と定義し，次いで「社会的行為」は「一人もしくは多数の行為者によって思念された意味に従って，他人の行動に関係せしめられ，かつその行動の過程においても，他人の行動によって方向づけられているような行為」[2] だといっている。ここから始めて，彼の社会現象の構成が試みられるのであるが，Weber において，個人の「社会的行為」こそ社会現象の最後的単位としての「社会的なるもの」の資格が与えられている。

ところで，Weber にあって，行為分析の用具として用意されたものはなにか。人間の社会的行為は，まず一定の動機によって生起し，この動機に従って，目的とこれに適合する手段を選択することに始まる。Weber によれば，動機とは「行為者自身あるいは観察者にあって，ある態度の意味的根拠 sinnhafter Grund とみえる意味関連」[3] である。このように行為主体にと

1）2） M. Weber : Wirtschaft und Gesellschaft, als Teil im ≫Grundriss für Sozialökonomik≪1 Aufl. 1922, Erster Teil, S. 1.

3） ibid. S. 5.

っての主観的な意味を持ったものであるが，およそわれわれはこれを理解しうるのである。そして，「行為」を単位と考えた時，観察者はこの行為の経過や結果について「因果的説明」を行なう。因果的説明とは「一定の観察された（内部的あるいは外部的な）事象に，別の一定の事象が継起するということ，あるいは両者が一諸になって現われるということを，可測的な蓋然律（従って，まれではあるが理想的な場合を考えれば数量的に与えられた蓋然律）をもって確定する」[1] ことである。つまり，行為の結果とし想定されているある観察された経験的事象が，まさにその行為によって継起したものかどうかを確定することである。Weber が，この確定手順として持出したのは，一種の思惟実験によって継起の確率を計算することのようである。この思惟実験の基準を与えるものは，日常心理的 vulgärpsychologisch な経験の規則 Regel der Erfahrung であるとされる。Weber によれば，ごく理想的な場合，この計算はまさに数字によって表わされるものだといっている。[2]

ともかく，こうした単位と単位とが「適合的連関」adäquate Verursachung によって結びつけられたとき，「社会関係」は二人以上の行為者が相互にオリエンテーションをもって，ある意味内容をもつ社会的行為を継起せしめているところに成立し，「権力」は「社会関係」に相手の抵抗に逆らって自己意志を貫徹する蓋然性が与えられたときに構成され，命令⇆服従という蓋然性において「支配」となり，社会関係の秩序が，特定の人たちによって維持されるとき「団体」が成立する。このように単位としての社会的行為の連鎖は「国家」にまでおよぶのである。

このような素描から，Weber が人間行為と社会構造を明瞭な方法論的意図でもって結びつけた最初の理論家であることを認容しても，彼が説くところの行為の分析そのものについて考えるに，分析用具として，われわれの目に止めうるものは，目的・手段の関係と動機という式があるにすぎず，行為

1）　ibid. S. 5.

2）M.Weber : Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre. S. 283-285.

から社会を構成していく手練の冴えは見えても，かえって社会が個人におよぼす作用，そこから出てくる自我意識の形成などに対する問題が，彼の視野に入ってきていない。はたして，彼のいう理解という考え方が，このような問題解決の鍵を用意しているものであろうか。この点，現代の社会心理学を知る者にとって容易にその不足点を衝くことができよう。事実，Parsons が行なった Weber 批判は，この心理学的観点の欠如補足という点にあった。[1)]

Ⅳ

Gurvitchは，「社会的なるもの」設定に関する如上の不調和は「視界の相互性」の原理によって是正されるとみなしている。[2)] すなわち「我」「汝」の immanence réciproque をもって「社会的なるもの」の基本的図式とし，個人と社会の対決も，究極のところこの原理で解決しうるものと考えている。彼はこの原理をラインの向側から学んだようである。「我」「汝」の呼応が「我」のあらゆる本質・行為に普遍的素地として滲透していることを自我の体験構造の分析から主張したのは T. Litt である。視界とは，「我」を中心として事物が遠近的に与えられている体験的空間をいう。réciprocitè de perspective は「時」の体験においても存在する……すなわち「過去」「未来」は「現在」的なるもの，つまり，それらはわれわれの働きを制約し，また働きによって制約されている。「現在」は「過去」「未来」の統一である。ゆえに「現在」の「我」は「過去」「未来」を内含する構造的全体である。その「我」は「時」を前後に遠近的に体験しつつ前進する。「時」は直線的でなく，「我」を中心に視界的に型態づけられている。…先に，Simmel が提唱した「心的相互作用」における空間は，事物の限界が明示されるところであった。視界的関係はそこに絶対空間を設置すること不可能といわねば

1）T. Parsons : Essay in Sociological Theory, Pure and Applied, 1949, Chap. V
2）「Vocation」. p. 29 et suiv.

ならない。その空間は体験我に応じて流動的である。「我」は，認識の内容に対する主観的意味での我でなく，体験しつつある全体的「我」である。認識論的自我のごときは，自己の身体を我に対する客観とするが，「我」は自己の身体をも含めて「我」の範囲とする。主・客関係的思惟においては，「社会的なるもの」の契機としての，生命ある具体的「我」の把握は不可能である。ところで，「汝」はまた「我」と同様な意味で体験「我」である。われわれに強い精神的・肉体的衝動が生じたとき，この体験は直接的にその訴えを理解する他の「我」の存在を予定している（Litt はこれを Ausdrucksbewegungen という）が，これは体験と表現の連続的・継起的事実であり体験が表現に即する作用の存在する意味では他「我」は媒介的判断を超えて自「我」に対する直接的所与である。「我の他我に対する意図において，私自身が彼の対象的世界に割り込みうるという確実性の存在していることをわれわれは観てきた。この確実性によって私は自己の我を“人の目”でみること，または，むしろ……というのは実際にはできない事だから，私は私が他人の目である程度まで“みられ”視られうるという事実を知る。他我が私に対してとる地位への転置を経て，私は他と同じく私自身が私の人格を“外から”考察し，私の対象たらしめうるという考えに到達する。こうして新しい見地に基づいて初めて自己および他の我の内容的相違は明らかになる。ゆえに，この立場もまた，私がそれによって私の限界を破り，私の我の限界の一面から脱却するところの相互性が実に私の発見の基礎をなしている」。[1] 従って「社会的なるもの」は「我」「汝」をけっして一方的「主」「客」関係として捉えず，「汝」は「我」に即した「我」であり，かく「我」は「汝」の把握において同時に根源的に「我」を把握する。現実は恣意的に切断された個人にも社会にもない。「我」「汝」の関係は，まさに超主観的客観的事実として所与的である。視界の相互的関係は，「社会的なるもの」の問題についての基本的思惟を方向づけている。「我」「汝」の，上のごとき関係の単一でないところの独自的性質をもって現われるものは「彼」という第三者

1）　Litt; Individuum uud Gemeinschaft, 2 aufl. 1924. S. 38.

を含めた「我々」関係である。この「我々」の本質性は「彼」の多数性においても原則的には変らない。Litt はこれを Geschlossener Kreis と呼んだのであるが，Gurvitch における「Nous」も同じものと考えてよかろう。

Gurvitch が求めた「社会的なるもの」は，「社会的交渉形式」les formes de sociabilitè である。彼はこれをあらゆる現実の集合体を構成している要素として設定した。社会的交渉形式は les ≪nous≫ et ≪les rapports avec autrui≫ のような，あるいは後者に含まれている Masse, Communaute, Communion のような，社会関係の結びつきである。彼自身の表現をもってすれば，les multiples manières d'être lié par le tout ou dans le tout である。この考え方の背後には，Gemeinschaft・Gesellschaft(Tönnies), solidalitè mècanique・solidalitè organique (Durkheim), in-group・out-group (Sumner), primary group・secondary group (Cooley) といった学説が予想されており，Gurvitch をもってそれらの最も orthodox な現代的後継者とするに異議はない。

Gurvitch の Nous 論をここに詳論する余地はすでに残されてはいないのであるが，その成立条件と構造についてだけ一見しておこう。

Nous は結合形式の一つである。[1] Nous は複数主体間の相互滲透と部分的融合によって成立するが，滲透と融合が為されるためには意識は常に開かれておらねばならない。[2] 開かれた意識は集合的直観に基づいて融合しうるのである。これは主体間の同一性によらずして，差異と類似によって直接的・直接的融合は成立する，しかし同一性だけでは相互連絡のない者同志の集合にすぎず具体的 Nous は成立しない。[3] Nous は諸個人の類似に伴なう差異を前提として直観によって開かれた意識間に直接的に生ずる部分的統一である。諸個人とこの統一の間には immanence réciproque があるが，個人に対しては非還元的実在である。[4] Nous に積極的・消極的の二種類があっ

1) 「Vocation」p. 98 et suiv.

2) ibid. pp. 91. 111. 112・114. 124. 139. 372.

3) ibid. pp. 113. 114. 116. 367-369.

4) ibid. p. 112.

て，集団形成の不可欠の要素としては前者があげられる。後者は，ただそれだけとしては集団を形成するものではない。[1] Nous actif は意識的であり，組織，規範，機能をもち，[2] 元来共同作業 oeuvre commune をもつ有意的・行動的なものであり，これと集団が組織，規範，機能をもつことは本質的に結びついている。Nous actif の特質は，実現すべき共同作業を持つ点にあり，しかも Nous は不可欠な前提として差異と類似の同時存在を要請する。Durkheim が類似をもって solidalité mecanique を説き，[3] conscience collective を Nous 的融合と同一視しているのは，Gurvitch によれば過誤であって，両者は差異と類以に基づく何程か solidalit organique のあるところだけに成立する[4] ものである。

Nous はもちろん複数性の契機をもち，しかもこの複数性は統一化されたもの，すなわちいくつもの視界的中心を含む統一性をもっている〔注：nous に部分を超えたなんらかの全体性・独立性を主張する立場は，Durkheim のごとく，[5] 必らず統一性の強調を含んでいる〕。しかも，上述せるところから推論しうるところであるが，「我」の複数性であって単なる We・Wir・Nous・われわれ……ではない。Je⇆Jeだけが Nous 的統一の部分たりうるものであって，Je⇆Toi, Je⇆Lui, Je⇆Toi⇆Lui, Je⇆Vous (Leur) すべて Nous たりえない。かく，Nous は差別的自我形式の形成する統一ではなく，差別的自我が，「我」なる共通性に転化した……Ausweitung des Ich として初めて Nous たりうる（多くの「我」を内包する主体的共同体験）。こうして，Nous はそれをなす Toi, Lui などとは全・個として相互内在関係にたち，しかもそれぞれの成員の多数性には還元できぬ統一的新実在である。「我」がまさに自身の統一を体験する者であることにおいて，その全体

1）ibid. pp. 159. 161. 162.
2）ibid. pp. 162. 164. 166. 170.
3）É, Durkheim : De la division du travail social, 1922, pp. 17. 18. 46. 47. 100. 119.
4）「Vocation」. pp. 200. 369.
5）「règles」pp. 14. 126. 148.

的統一が成立している。この点に，われわれは「社会的なるもの」の実相を見出しうるのではないか。

× × ×

最後に，Parsons はあらゆる社会現象の理解にあたり，個々の個人の「行為」を中心にもってきて，その行為を動機づけるもの，あるいは規制するものはなにかを固定化しようとしている。Gurvitch は les formes sociabilitè から出発したことを先にみたが，彼の理論からは motivation の問題は表面化してこなかったのである，Parsons では motivational-orientation と value-orientaton が，その理論全体を貫く原理として打出されている。後者が Gurvitch の Les formes sociabilitè に相当しているものであるが，Parsons では pattern variable 価値パターンの変数として導入されている。その変数の背後に，われわれは Durkheim 説を予想するのであるが，総じて Parsons 理論は「行為」理論を基礎として枠づけられていることからみて，Weber＋socialpsychology ということで—Gurvitch を，われわれは Durkheim, Simmel の現代的系譜としてみたのであるが——Weber の現代的系譜としてみることができる。Weber の「行為」の「意味」の「理解」あたりから，その系譜を明らかにすることが，われわれに残されたいま一つの問題である。他日この責を果したい。